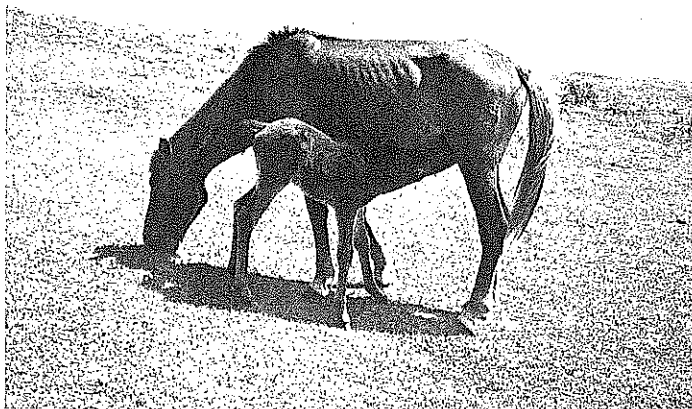


四 御崎馬のいななき

串間市の南端、都井岬。ここには、江戸時代から放し飼いにされ、野生馬として国の天然記念物に指定されている馬が生きています。その名は「御崎馬」。

私は五月の連休中、都井岬のふもとの親戚の家に行きました。

その日、私は夜明け前に起きました。親戚のおじさんが、子馬が生まれそうだと教えてくれたからです。おじさんは、岬の馬たちを保護している都井岬牧組合に入っているのです。夜明けの岬は肌寒く、海のほうが少し明るくなっていました。「あそこだ。」おじさんが指さしました。草原が平たんになったところに馬が一頭立っています。その足もとで、黒いものが動いていました。生まれたばかりの子馬です。子馬の体はまだぬれていて、光っていました。母馬が頭のほうからなめてやると、子馬は気持ちよさそうにじっとしていました。しばらくすると、子馬は立ち上がろうともがき始めました。細い脚です。おまけにずいぶん長く見えます。倒れたり、よろけたりします。後ろ脚が立ったかと思うと、前脚ががくと折れてしまいます。「しっかり。」私は心の中で応援しました。自分で立たなければお乳はもらえません。何度も何度も子馬は挑戦します。ようやく立ち上がった子馬は、よろける脚をふんばって歩きます。一歩また一歩。そして、



とうとう母馬の腹の下にもぐり込んだのでした。

「やった。」私は、思わず小さく叫びました。何だか胸がいっぱいになりました。気がつくと、いつの間にか夜が明けて、太陽が、岬の緑を明るく照らしていました。

私は御崎馬のことがもつと知りたくなっておじさんに聞きました。おじさんは、うれしそうに話してくれました。

—人間の子供と同じで、子馬はよく昼寝をする。その間に、母馬たちは草を食べながら移動してしまう。子馬が目覚ましたときには、近くには母馬はいない。そんなとき、子馬はいななきで母馬を呼ぶんだ。人間の言葉で言えば「おかあさん」かなあ。長いこと岬で馬を見ているが、いななきの違いはよく分からない。でも、馬の親子には分かる。すぐに返事のいななきが聞こえて、母馬が迎えに来るんだよ。

そういえばこんなこともあったなあ。病気で失明した馬がいたんだが、その馬に子馬が生まれた。母馬が生きていくだけでも大変なのに、子馬のめんどうまで見られるのかと心配だった。水飲み場に向うときのことだった。石につまずいて母馬がうまく動けずにいた。すると、子馬がさつと前に行って「ひひん」といなないた。母馬が追いつくと、子馬は少し前に行って、いななく。母馬が追いつく、また前に行って鳴く。いななくことで母馬を案内していたんだ。「おかあさん、こっちこっち。」という具合に。こうして、無事、母馬は水飲み場にたどり着くことができた。岬の中の自動車道を横切るときも、いつも子馬が案内していた。あの親子の姿には、本当に心が温かくなったね。その子馬は、しばらくして群れにかえしたが、母馬がいなくなると、決まってもどつて来ていたよ。—

おじさんはほかにも、岬の自然の中での馬たちの生活の様子を、季節ごとにいる話してくれました。「でも、問題もあるんだよ。人と馬との問題だ。」

おじさんの声が急にさびしそうになりました。

——岬の馬はおとなしいだろうと平気で近づいたり、いたずらしたり、かわいいからとお菓子をやったりする人たちがいる。驚いた馬が人をかんだり、人間の与えたえさで胃腸障害を起こして死んだりすることがあるんだ。おじさんたちは、そういうことが起こらないように、毎日、岬を回って、注意をはらっている。でも、なかなか、なくならない。人と馬とのトラブルがいちばんつらいね。——



話を聞きながら、私はどきっとしました。初めて都井岬に来たときのことです。小学生だった私は、子馬といっしょの写真撮りたくて、お菓子を持って、子馬のいるところに走って行きました。

「お菓子を食べさせているところを写せないかな。」と考えていたのです。親戚のおばさんに途中で止められて、しかたなくあきらめました。でも、「せっかく来たのに。かわいい子馬と記念写真を撮りたかったのに。」という不満は消えませんでした。そのときのことを思い出したのです。

おじさんの話は続きます。

——もつとつらいことがある。交通事故なんだ。岬には入口から灯台まで、自動車道が走っているね。制限速度は時速三十キロ。この道路のおかげで、みんなは快適に岬に来て、馬を見ることがができる。けれど、毎年二、三頭の馬が交通事故で死んでしまうんだ。また、道路のわきの溝に落ち込んで身動きが取れず、死んでしまった馬もいたなあ。——

私の心に、今見てきた生まれつかりの子馬と、死んでしまった馬の姿が交互に浮かびました。

自然の中でのびのびと自由に暮らしてきた馬たち。自然の中で死んでいくのは、かわいそうだけれど、それはしかたのないことかもしれない。でも、人間のせいで死んでしまう馬たちを、しかたがないとはいえないと思うのです。馬の命も、人間の命も、同じ命です。三百年間もの長い間、自分たちの力で生き、子を生み、育て、次の世代へ命をつないできた御崎馬。その命をこれからも絶やさないうため、私たちはどうしていけばいいのでしょうか。

「都井岬は、もともと、馬の世界だった。そこに人間が入ってきた。馬たちの生活には自然の知恵があるし、親子の姿に心が温かくなる。多くの人に御崎馬を知ってもらいたい。ただ、もう少し、人間は接し方を考えないといけないと思う。」
静かに話してくれたおじさんの言葉が心に響きました。

